

# 琉球大学学術リポジトリ

脳性まひ児の書きことばの学習による「世界づくり」に関する研究  
—教師の聞き書きによる代筆支援の取組みを通して—

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学大学院教育学研究科 公開日: 2022-05-31 キーワード (Ja): 話しことばと書きことば, 代筆支援, 綴り方, 世界づくり, 内面世界の表出と共有 キーワード (En): 作成者: 船越, 裕輝, 村末, 勇介 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24564/0002018002">https://doi.org/10.24564/0002018002</a>

## 【実践研究】

# 脳性まひ児の書きことばの学習による「世界づくり」に関する研究

—教師の聞き書きによる代筆支援の取組みを通して—

船越 裕輝<sup>1</sup>・村末 勇介<sup>2</sup>

A Study of “Creating the World” by Learning the Written Language of Children with Cerebral Palsy:

Through the Teacher’s Efforts to Help Write What S/He Heard for Interviewees

FUNAKOSHI Yuki<sup>1</sup>, MURASUE Yusuke<sup>2</sup>

## 要 約

脳性まひのあるA（小3）は、身体に障がいがあるため書字や読書が難しかった。しかし、会話をすることは可能であり、話をするのが大好きであることから、教師が聞き取ったAの「話しことば」を「書きことば」に変換する代筆支援という形で日記文や作文、感想文、手紙文等を書く実践に取り組んだ。年間を通し継続して行っていく中で話しことば自体にも変化が見られ、読み手や他者を意識した文章も書けるようになる等、A自身の「世界づくり」にとっても影響をもたらした。本研究においては、代筆支援によって生まれたAの文章を元に、Aの内面的な成長を発達の視点から考察することで、書きことばの学習の意義を明らかにするとともに、代筆支援の取組みにおいて留意すべき視点と課題とを整理した。

キーワード：話しことばと書きことば、代筆支援、綴り方、世界づくり、内面世界の表出と共有

## 1. はじめに

話しことばを書きことばにする学習の主たる目的は、自分自身の思考を対象化し整理することができることである。また、その書きことばにした文章を読み返すことで、思っていたことや考えていたことを振り返ることができ、回想したり、修正したりすることも可能になる。

文章を書く学習の順序として、梶村（2017）は「まず生活を表現することが基本」であり、「子どもが話したことを聞き取り、文字を使用して文章を表現する口頭作文…（中略）…という場合が考えられる」と述べている。それから、「口頭作文において、子どもは自分が話した内容が文字で表記されたことに興味や関心を示し、文字や書き言葉の学習に意欲的になり、『先生あのね』という形で、生活のなかで発見したり・心を動かしたりしたことを、覚えた書き言葉を用いて日記文に書いてきたりするようになる」とし、書きことばの獲得の学習過程として、口頭作文から始めることが基本であるとしている。このことから、普段の生活での会話等の話しことばを書きことばに変換していくことが、書きことば獲得のための最初のステップになると考えた。

森原（2015）は、聴覚障害のある子に対して話しことばを書きことばにする発達の意味について考察する中で「上手に書けるようになることだけを急ぐのではなく、そうした『書きことば』にまつわる、ことばにならない様々な感情や情動も含めて理解し共感していくことが、指導者には求められるのであろう」と述べている。教師が話しことばを丁寧に聴き取るにより、より豊かで深みのある書きことばの獲得へ繋げていけるのではないだろうか。

<sup>1</sup> 沖縄県立はなさき支援学校・琉球大学教育学部非常勤講師 funakoyk@open.ed.jp

<sup>2</sup> 琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻 ymurasue@edu.u-ryukyu.ac.jp

また、竹沢（2003）は、聴覚障害児教育におけることば学習の4要素、つまり、子どもたちのことばを育てるときに大切なこととして、「①受けとめることができる人間関係、②言いたくなるような生活の中身、③豊かな生活を意識化する（どこを切り取るか）、④直接的なことばの指導」を挙げている。「とくに①②が大切で、書きことばの前に話しことばの充実が重要」とし、ことばを指導する大人側との共感的な関わりの重要性について指摘している。

これらの指摘は、「子どもが自発的に発したいと思えるような状況におかれているとき、大人が子どもの言葉に全身を耳にして向かうとき、それも『聞いている』という受動の行為が『聞かせてもらう』という能動の行為に変わったときに、子どもは雄弁になる」とした内田（1990）の言葉と重ねて捉えることで、子どもたちに関わる教師自身に要求される極めて重要な実践課題として確認すべき内容である。

以上を前提としながら、本実践においての目的は、まずAの日常を聴き出し、A自身のことを知ることを第1とし、A自身を丸ごと理解し受け止めることである。そして、第2に「話しことば」を「書きことば」にし、繰り返し読み返すことでA自身に自分の生活を振り返らせ、自分の考えをより一層深めさせることである。また、書きことばとして文章にする段階で気持ちをことばにする力や想像力を働かせて深く掘り下げる。書きことばと一緒に考える中で新しいことばの獲得やその使い方の学習につなぐことで、語彙力や言語活動を豊かにできるのではないだろうかと考えた。さらに、日記文等を保護者やAと関わりのある他の職員等にも読んでもらうことで、A自身の内面世界を周りの大人が共有し、より豊かなつながりをつくり出したいと考えた。

本研究においては、こうして展開した実践から生まれたAの日記文等とそれらが綴られた背景や、綴られることによって生まれた「ドラマ」を分析・考察の対象とする。Aの書きことばの学習が、個の成長過程としての「世界づくり」（内面的な成長）<sup>1)</sup> に対して、どのような役割を果たしたのかを明らかにするとともに、障がいとともに生きる子どもたちにとっての書きことばの獲得の意義と、その具体化にあたっての実践課題を明らかにすることを目的とする。

（1章・共同執筆）

## 2. 対象児Aについて

Aは肢体不自由児特別支援学校に通う小学部3年生である。幼少の頃から学校に隣接しているB療育医療センター（以下、センター）に入所しており、週末や長期休暇のときは帰宅している。センターは重症心身障がい児者が多く入所しているため、子ども同士の会話による関わりは少なく、本児の話し相手は、センタースタッフと言われる保育士や介護員、看護師等が主である。そして、Aは余暇時間の多くをテレビ視聴に費やしていた。

家族構成は母親・兄（1つ年上）・祖父母の5人である。週末の帰宅時は、兄や兄の友だちと遊び、時々、家族で外出することもあるようであった。

Aには四肢麻痺があり車イスで生活をしている。左手の人差し指を動かすことができ、左手でスプーンを握って自力で食事ができる。着替えやトイレ、入浴等、生活の全般は全面的な介助を必要としているが、動かせる左手の指を使って電動車イス操作の練習もしている。

文章の読みに関しては、一文字ずつ読む段階であり、また視線が動くため同じ行を繰り返し読んでしまうこともあり、文章を読んで理解することは難しいようであった。しかし、読み聞かせをすると、一度聞いたことをよく記憶していた。それから、左手の人差し指でiPadの操作は可能で、かな入力ができるが、1文字タップするのに約4～5秒を要した。

Aは余暇時間のテレビ視聴では、特にスポーツ番組を好んで観戦していた。相撲や野球（プロ・高校）、サッカー、バスケットボール、テニス、水泳、バレーボールで、選手の名前や背番号等もよく覚えており、また、それぞれのルールもよく理解していた。その他にもバラエティや「お笑い」、ニュース、国会中継も好んで視聴していた。

### 3. 「書きことば」の学習実践の方法

#### (1) 代筆支援の手続き

代筆支援の手続きとして、以下の4つの段階を踏まえながら綴っていった。

- ①Aが話したことを忠実に、実践者が紙に代筆する（この段階で文章になっていなくても、そのまま書く）。
- ②代筆し終えた文章を実践者が読み上げ、文章表現で意味が伝わらないときは確認をしながら、「この言い方をもう少し詳しく言うと何？」等と質問したり、「なぜそう思ったの?」、「あなたはどうか考えたの？」等と深く掘り下げたりして、やりとりをしながら推敲する。
- ③推敲した文章を実践者が日記帳に清書する。清書のとき、読めるようになってほしい漢字を使うようにした。
- ④清書した文章を実践者が指でなぞりながら、Aに音読させる。

実践者が代筆支援する際に、特に配慮したことは、Aが話したことを忠実に書き、言い換えたりしないように心掛け、実践者の意見を入れないことである。また、推敲のとき「それで」や「なぜなら」等の接続語を「合いの手」のように時々入れて、A自身の思いや考えを引き出し、広げられるようにした。

#### (2) 日記文等、代筆支援場面の実際

＜代筆支援場面＞（Aの隣に実践者が座った・図1）

実践者「今日の日記文のテーマは何にする？」

A「オバマ大とうりょうが、らい日したことを書きたいです」

実践者「オバマ大統領が日本に来ていますね。テレビで観たの？」

A「はい、ニュースで見ました」

実践者「OKわかりました。では、『オバマ大統領が来日したこと』を、どうぞ」

（と言って、実践者は白紙を取り出し鉛筆を持った）

A「オバマ大とうりょうがらい日したこと」

「きょう、オバマ大とうりょうが広島をほうもんされるといふ」

実践者「へー、今日、オバマ大統領が、広島を訪問するんだ」

（知ってはいたが、話す意欲を高めるために取って代わって打った）

A「ぼくにとっては、うれしくないことでございます」

実践者「なぜ、うれしくないのですか？」

A「ぼくたち日本国みんは米ぐんのトップが「広島にげんしばくだんをおとせ」といったのに、なぜオバマ大とうりょうがくるのか、ぼくはそれが、今日は、ふあんでふあんでこわい」

実践者「不安で、不安で、2回続いているけど、続けて書くということは、不安が2倍ということ？」

A「そうです、めっちゃ、ふあんでふあんです」

実践者「そうなんだ、不安なんだ…オバマ大統領が原子爆弾を落とせと命令したわけじゃないと、先生は思いますが…」

A「米ぐんのトップだからです」

「日本はけいびとか、げんじゅうたいせいで、とおらせないみちもある中、今日の日を、ぼくはむかえたのです」

実践者「オバマ大統領が広島に来ることが不安なんだね。先生はもっと仲良くなった方がいいと思います。できれば沖縄にも来てほしいです」

A「ぼくはそう思いません」



図1 A（右）と実践者

Aは正義感が強く基地問題等にも興味があり、それに関連するニュースが出るたびに実践者にも報告してくれた。この場面でのAとのやりとりは以上のように展開し、次のような日記文が完成した。

オバマ大とうりょうが らい日したこと 5月27日・金曜日

今日、オバマ大とうりょうが広島をほうもんされるといふ。ぼくにとってはうれしくないことでございます。

ぼくたち日本国みんは米ぐんのトップが「広島にげんしばくだんをおとせ」といったのに、なぜオバマ大とうりょうがくるのか、ぼくはそれが、今日はふあんでふあんでこわい。

日本はけいびとか、げんじゅうたいせいで、とおらせないみちもある中、今日の日をぼくはむかえたのです。



#### 4. 作文内容の分析と実践者による考察

##### (1) 日記文等の題材の分類

年間を通して綴った日記文や感想文、手紙文等の題材数は216、日記帳は6冊に及んだ（図2）。Aは、テレビ視聴に基づく題材を選ぶことが多かったため、これらについては社会的関心として「スポーツ」と「政治」に分けることにし、全体を7つのカテゴリーに分類した。分類の視点は、「①社会的関心・スポーツ（社ス）」、「②社会的関心・政治（社政）」、「③家族のこと（家族）」、「④先生のこと（先生）」、「⑤学習課題（学習）」、「⑥身近な人への手紙文（手紙）」、「⑦その他（他）」である。

表1は、月別にAが話した日記文等の題材を整理したものである。題材数を比較すると、「社ス」が53、「学習」が68と突出して多かった。テレビからの影響が強い「社ス」と「社政」を合計すると71（全体の約3分の1）となり、テレビ視聴で知ったことを日記文にしていることが多い。テレビ視聴が、Aにとって日常の中心的な活動となっていることが伺える。

表1 題材数の月別一覧表

月	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
社ス	0	9	7	5	10	10	7	0	4	1	0	53
社政	0	3	3	0	1	1	4	2	2	1	1	18
家族	1	2	4	0	0	1	1	2	1	0	1	13
先生	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	2
手紙	0	1	5	1	3	0	5	0	0	7	2	24
学習	0	0	0	5	1	5	11	15	13	6	12	68
他	2	7	2	3	4	1	5	3	5	5	1	38
計	3	22	22	15	19	18	33	22	25	20	17	216

##### (2) 考察の視点

資料としては、年間を通して綴った日記文や感想文、手紙文等の中から象徴的なテーマや重要と考えられるエピソードの中から象徴的なものを抽出し、そのときのAと実践者のやりとりを、Aの内面的な成長に注目しながら考察する。ここでは、Aの内面世界を具体的かつ、丁寧に捉えることが重要であることから、Aの言動を数量的に捉えるのではなく、質的に捉えて検討することにした。

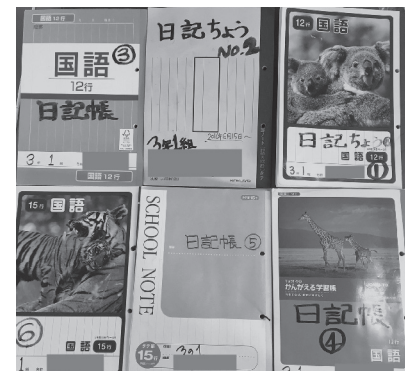


図2 6冊の日記帳

##### (3) エピソードと考察

###### ① エピソード1・スポーツのテレビ観戦（巨人阪神戦・大谷翔平・イチロー・白鵬）

うれしかったこと 5月12日・木曜日

きのう、巨人阪神戦がありました。阪神一点おめでとうございます。あとは巨人のちょっとした、せめにたいし、阪神はおいかけられませんでした。けっかは3対1で巨人が勝ちました。イエーイ。

Aは校長が阪神ファンであることを知っており、残念がる校長の姿を見たいがために「(昨日の巨人阪神戦のことを日記文に)書いてほしい」と言ってきた。そして、日記文を書いたあと、校長室に行きたいと言った。校長は日記文を音読しながら、「阪神は巨人に負けたのか、残念」と、声を張り上げて大げさにパフォーマンスしてくれた。その姿を見て、Aはガッツポーズをして喜んでいた。

イチローメジャーリーグ 6月9日・木曜日

イチローは、あと十本で、がいこく人せん手のさいたキロクをぬかします。

イチローがんばれ。チームメイトもおうえんしています。

一ばんは、バッティングコーチとかんとくです。

今日の「朝チャン」で「イチローせん手、ビートルーズをぬかせ」と言っていました。

イチローは、バッティングもうまいし、メジャーリーグでは、人気があります。ぼくとおなじくらいすごい人です。

「イチロースズキ」というコールが、ながれると「フィ、ユーイー」とか、かんせいがわきおこります。

チームのファンとかがします。

イチローがとうるいをせいこうしたとき、グーをした手をあげたり、手をたたいたり、ぼうしのつばをさわってサインみたいにしたり、人さしゆびを口のところで「フー」といきをふきかけて、かんきやくせきまで、とどくように「フー」とやっていました。

まだ一回だけどまるでちがが、きまったようなふんい気です。

そのし合のときには、オバマ大とうりょうもいらっしゃってありました。たぶん大とうりょうせんようの車で、いらっしゃっていたと思います。

イチローは、三るいとうるいもできますし、打って、走ってのパフォーマンスもできます。

会じょうをもりあげることもできます。

イチローは、きんトレもして、まい朝、し合があるときは、カレーライスを食べております。

(※太文字下線は、実践者による。以下同じ。)

本文の中で「ぼくと同じくらいすごい人です」とAは話していた。それは、実践者がときどき「先生と同じくらいすごい人だね」等というのを真似して、実践者に対抗したために意図的に使っていたようであった。また、イチロー選手が盗塁したときの仕草を、事細かく観察していることがこの日記文から伺え、集中して視聴していることがわかった。それから、「まるで〇〇のような」と仮定的に表現したり、「たぶん大統領専用の車で…」と、テレビで放映されていないことまでも想像して言ったりしていた。

大谷すごい 10月17日・月曜日

大谷投手は、球そく百六十五キロで、さいごかと思いましたが、それだけではありませんでした。

チームの支えもあって、ぼくはこれまで、大谷がこれたんだなと思いました。

栗山かんとくは、ニュースでこう言っていました。

「大谷が自分のところに目せんを送っていたので、九回に大谷を出しました。」

かんとくはさらにこう言っていました。「大谷は、きたいにこたえてくれた」と。

ぼくは、あらためて思いました。大谷はやっぱりかっこいいと。

グットスポーツの里さきさんは「し合会場で見えていたところ、自分は、百六十五キロがくると思っていた」と言っていました。

ぼくは日本シリーズで、日本ハムにかけます。大谷はすごいと思います。日本シリーズでの活やくもきたいしています。

大谷選手の活躍をAはたのしみにしており、大谷選手の話は、日記帳に4回も登場した。また、監督や解説者の話も鮮明に覚えていた。それから、「日本シリーズで、日ハムにかけます」と、自分の意見もしっかり言っており、まるで豆解説者のようであった。保護者も的を射たAの解説を聞いて感心していたようである。

白鵬さんへ 11月21日 住所 宮城野部屋 白鵬翔さん

ぼくは、白鵬さんが大好きなAともうします。小学校3年生です。沖縄に住んでいます。

きょ年の12月の沖縄場所、白鵬さんといっしょに写真をとらせていただきました。

ぼくは車イスにのっています。おぼえていますか。

1000勝たっせいおめでとうございます。足の指のこしょうは大じょうぶですか。

15日間、テレビで白鵬さんが勝つかかと、しんけんに見えています。

らくな相手はいないと思いますが、ぼくはずっと、白鵬さんを応援しています。

まず、千代の富士さんの1045勝をぬかしてください。白鵬さんが勝ったら、ぼくは、いつも、よろこんでいます。

白鵬さんは、試合前のひかえのとき、ざぶとんにすわっているときも、試合のときも、ぜんぜん顔をゆるめません。

しんけんな顔ををしていて、そこが、ぼくは、かっこいいと思います。

今場所も、ぜひ、優勝してください。応援しています。

いつもテレビで、白鵬さんが花道に立っているときに、カメラがとらえると、ぼくは、やっぱり白鵬さんは、かっこいいなと思います。

白鵬さんは、日々、きびしい親方の元、けい古をがんばっていると思います。

ぼくも、白鵬さんみたいに、日々、がんばって、かっこいい人になりたいと思います。

今年度の沖縄場所も行きたいのですが、行けないので、手紙文を書かせていただきました。

C 特別支援学校 3 年 A

A は相撲とプロ野球が大好きで白鵬の大ファンである。毎場所テレビ観戦を欠かせないようである。「白鵬へ手紙文を書く？」と実践者が提案した。住所もインターネットで一緒に調べた。

文中の「とらせていただきました」や「書かせていただきました」等、A は謙譲語も使っており、どこで覚えたのか、実践者にとっては新しい発見であった。また、テレビを観ていて改めてかっこいいと感じたことを率直な感想としたり、日々の厳しい稽古のことを想像したり、手紙文を読んでもくれる白鵬に思いを寄せながら手紙文を綴っていった。

日記文のテーマは相撲だけでなく、プロ野球やサッカー、バレーボール、バスケットボール、水泳等の試合結果や、ある選手に焦点を当てた内容が多かった。特に 1 学期の日記文のテーマの約半分は、スポーツ観戦に関することであった（表 1 を参照）。

#### 〔エピソード 1 に関する実践者の考察〕

A はテレビでのスポーツ観戦が大好きで、アナウンサーや解説者等の発言もよく記憶していた。また、選手の仕草を細かいところまで観ていることや、テレビで観たこと以外のことも想像することができた。

それから、実践者は日記文を通して A のことをいろいろな人たちと共有することで、より深い関係性をつくれなにかと考えた。保護者や学校職員、センターのスタッフにも読んでもらい、A へのコメントもお願いした。すると、読んでくれた学校職員の中には、A の内面世界をより知ることによって A との会話を膨らませられたようで、「この日記文、面白い、また読ませてほしい」と言っていた。また、保護者も A が帰宅する週末は、日記帳をたのしみにしていた。

2 学期になって、A が実践者に話してくれてわかったことであるが、相撲の決まり手や技、バレーボールの新しいルールのこと等をあまり知らない（ホントは知らないふりをして聴いていた）実践者に教えてあげるように丁寧に話してくれたり、野球好きの学校職員には野球の話題を共有したり等、相手の興味関心に合わせて話題を変えて会話をたのしんでいることもわかった。

スポーツ観戦で A は各々のスポーツのルールをよく理解しており、アナウンサーや解説者等のコメントもかなり正確に覚えていた。それは、書字や読書が難しい A にとって耳からの情報が第 1 となり、記憶の頼りとなっていったと考えられる。

#### ② エピソード 2 家族への手紙文（敬老の日・お兄ちゃん）

じいじいとばあばあへ 9 月 16 日・金曜日

いつも、ぼくのことを大事にしてくれてありがとうございます。

じいじいとばあばあが、ぼくを大事にするおもいが伝わってきます。

じいじいは、ぼくのことをいつも気にしてくれてとてもやさしいと思います。

ばあばあは、ぼくのけんこうをかんがえてくれてとてもうれしいです。

いつまでもげんきでいてください。 A より

敬老の日が近づき祖父母に手紙文を綴ることを A に実践者が提案した。幼少期から祖父母と過ごす時間も多かったようで、センターへの送迎もほとんど祖父母が行っているようであった。また、「ぼくを大事にするおもいが伝わってきます」から、祖父母のことを思いやる気持ちが読み取れた。

お兄ちゃんへ 2 月 10 日・金曜日

おたん生日、おめでとうございます。いつもあそんでくれるお兄ちゃんが、ぼくは大好きです。

勉強をいやがらずに、がんばっているところが、ぼくはカッコイイと思います。

毎週、ぼくが帰ったとき、「一緒にあそぼう」と、さそってくれたり、気づかってくれるところが、お兄ちゃんの

やさしいところだとぼくは思います。

いつもぼくのことをかわいがってくれて、ありがとうございます。

お兄ちゃんのしょうらいの夢は何ですか？バドミントンのせん手になって、オリンピックに出ることですか。

ちなみに、ぼくの夢は、大学に行って、いろいろなことを学んで、仕事をして、お金をためて、けっこんまで、いたるかどうかわかりませんが、たのしくハッピーにくらしたいです。

お兄ちゃん、あらためてたん生日おめでとうございます。これからもたくさんあそびましょう。

かわいい弟のAより

Aが1つ年上の兄を慕っているのがよくわかった。日記文の中にも何度か登場するお兄ちゃんであるが、週末帰宅したときの様子を聴いていると、一緒に遊んだり、笑わせてくれたり、声かけしてくれたり、やさしく接してくれているようであった。また、お兄ちゃんの将来の夢は何かと問いかけながら、自分の夢もしっかり綴っていた。このことは、その後の作文のテーマにすることに繋がった(エピソード7)。それから、文中の「あらためて」や「かわいい弟の」は、別の授業の中で出てきたことばやフレーズで、Aは、すぐに活用していた。

#### 〔エピソード2に関する実践者の考察〕

Aは週末の帰宅をたのしみにしていた。小1のときまでは、寂しくて泣いてしまうこともあったようで、週末を待ちきれず、週の中頃には家族とテレビ電話をしていたようであった。

Aはときどき家族の話をしてくれた。特に祖母には「好き嫌いなく食べなさい」と厳しく言われているようであったが、そういう祖母のことばを嫌だなと感じつつも、厳しさの裏にある愛情をしっかりと感じ取っているのではと考えられる。祖父母や大好きなお兄ちゃんから受けている愛情が、A自身の自己肯定感を支える基礎となっているであろう。

#### ③ エピソード3 お笑い(先生のギャグ・銀シャリ・PPAP)

先生のギャグ 7月8日・金曜日

いつも先生は「おはようござい<sup>な</sup>す」と言い<sup>な</sup>す。ギャグできょうしつがよごれ<sup>な</sup>す。いつもDさんのおうちでもうけないみたいです。それはあたりまえだと思<sup>い</sup>な<sup>す</sup>。ぼくのギャグのほうかうけると思<sup>い</sup>な<sup>す</sup>。そういう先生ですが、ギャグでいつもまーおもしろい<sup>な</sup>す。C特別支援学校のC特祭をDさん、ぼくの先生といっしょに見に来てほしい<sup>な</sup>す。おもしろいと思<sup>い</sup>な<sup>す</sup>。ぼくたちのせいかを見に来てほしい<sup>な</sup>す。これからもギャグきょうしつをつづけていきたいと思<sup>い</sup>な<sup>す</sup>。又、ネタちょうも先生がかってき<sup>な</sup>す。いつもギャグでいっぱいギャグきょうしつにしたいとつよく思<sup>い</sup>な<sup>す</sup>。

語尾に「なす」を何度も使っているのは、教室ペランダの学級園にナスとゴーヤーの苗を植え、実践者が「なす」のダジャレを多用したところ、本人の中でそれが印象に残ったようであった。また、週に1回の教室掃除をするとき、実践者が「ギャグで教室が汚れているので掃除をしよう」と持ちかけたのがきっかけで、その「ギャグで教室が汚れている」というフレーズが記憶に強く残ったようで、そのあとも何度も使用していた。それから、手紙文のやりとりを何度かしているDさん(実践者の小学生の娘)と、実際に会ってみたいという気持ちが膨らみ、まだまだ先ではあるが、11月の日曜日に行われる学校行事の「C特祭」に招待したいと思ったようであった。

銀シャリ優勝 12月13日・月曜日

M1グランプリで銀シャリが見事優勝いたしました。ぼくは「ドレミの歌」をかえ歌にするなんて思ってもいせんでした。ぼくは大笑いしました。ぼくは銀シャリに、はまっちゃいました。ぼくはこう思いました。

いつかM1グランプリのしんさいんになってみたい<sup>な</sup>と。銀シャリにお笑い界をもり上げていってほしい<sup>な</sup>す。

ぼくは2病棟で銀シャリのネタを見て大笑いしていました。

ぼくは銀シャリのネタが始まって終わるまでずっと大笑いしていました。

ぼくはテレビでM1グランプリを見て、どのネタもおもしろかったのですが、銀シャリがいちばんおもしろかったです。

ぼくがしんさするならば、銀シャリのとく点を百点まん点にします。

なぜならば、テンポも良かったし、笑うところがはっきりしていて、ぼくも笑いやすかったからです。

銀シャリはみんなが思いもしなかったはっそうをしたとぼくは思います。

「ドレミファソラシド」とか「ドーはドーナツのツー」が面白かったです。



お笑い芸人やお笑い番組が大好きなAにとって、笑いはたのしいものであり、「笑いに囲まれて生きていきたい」とよく話していた。また、漫才の解説も審査員になったつもりでやるようになっていた。それから、実践者からの提案で「ネタちょう」とネーミングした手の平サイズの小さなメモ帳にAや実践者が考えたギャグやダジャレの中で、Aがいいと判断したものを綴っていった。ネタちょうは1ネタ1ページ、年間で約100ページにもおよんだ。Aはときどき、それを「1ページ目から読んでほしい」と要求し、その読み聞かせを何度もした。「ぼくと先生はギャグの馬が合う」とも言っていた。

PPAPについて 12月1日・木曜日

さいきん、PPAPがはやっています。小学生に一番マネされていると思います。

ぼくのお兄ちゃんもPPAPのダンスをおどっています。PPAPのダンスをおどっている人はピコ太郎と言います。

今、ピコ太郎のダンスが世界中で、はやっています。

歌が英語だから、外国人も、歌いやすいし、おどりやすいのかもしれません。

ぼくはPPAPを、毎日おどりたいぐらいです。

なぜかと言うと、世界でも、日本でもはやっているからです。ペンをアップルにさすところがおもしろいです。

なぜかと言うと、ありえないからつい、笑ってしまいます。

もっと世界中に広めて世界の人におどってほしいとぼくは思っています。

国内だけでなく、全世界で流行しているお笑いについて、なぜ流行するのかについても考えて話してくれた。「なぜかと言うと」は実践者からの「合いの手」的な質問で付け加えた。それに対して、ほぼ即答でしっかり答えていた。

#### 〔エピソード3に関する実践者の考察〕

Aはバラエティ番組や漫才やコント等も好きで、スポーツ観戦と同様、よくテレビ視聴しているようであった。実践者から毎日繰り出されるダジャレに対して、多くは「疲れるわ」等と反応していたが、お腹を抱えて車イスにうずくまり、笑い転げることもあった。1度だけ「先生、何か面白いギャグをお願いします」と要求され、「ギャグ（ダジャレ）は出してと言われても急には出せないよ、フッと頭に浮かぶんだよ」と返すと、「そうだよ、急には出ないよね」と納得していた。Aにとってギャグやお笑いが生活の中での、たのしみの中心であり、明るく前向きに生きていく上での拠り所になっていると考えられる。

#### ④ エピソード4・学習課題（新聞投稿・国語学習・食レポ・巨人キャンプ）

E小学校とこうりゅうしたこと 5月17日・火曜日

きょう雨の中、E小学校のおともだちがきてくれました。

FくんとGくんがぼくのパートナーでした。とってもいいおともだちができました。

二人はなんとぼくとおなじ巨人ファンでした。どっかわすれたけどおなじOがたでした。

三人ではなしかみあっているようでした。ゲームのときは「もう一回おねがいします。」

「えー」っていいました。だけど、なぜかかちました。

ぼくは赤チームでよかったとおもいます。なぜなら二れんしょうしたからです。

このチームでさいこうです。いいなかができました。

また、いつか知らないけど、C特別支援学校にあそびにきてほしいです。

またいろんなはなしをしたいとおもいました。いろいろなしつもんももっとしたいです。

上の文章は、交流会の取材に来てAにインタビューをした新聞記者に問い合わせ、新聞投稿することになった。すると次の週、新聞に掲載された。Aは新聞記事を事務員からもらって、「よっしゃー、有名人になれる」とガッツポーズをして喜んでた。後日、新聞社から掲載料ということで図書券が送られてきた。週末、保護者と一緒に買い物に出かけたようであった。

ぼくはボーイング777（なりきり作文） 10月14日・金曜日

お客さんをいっぱいせませす。安全にひこうできるようにそうじゅうしがコントロールします。お客さんを安全に目き地までのせられるようにとんでいます。風がとっても気持ちいいです。ぼくは、りりくするとき「よし、がんばるぞ」という気持ちわき出てきます。お客さんは耳がいたくても、たのしくてワクワクすると思います。ちゃくりくしたあと、お客さんが空のたびは、たのしんでもらえたかなと思います。空の、み力を伝えられたかなと思います。ぼくはホッとします。

上の文を綴る数週間前、校外学習でJ T A（日本トランスオーシャン航空）の工場を見学した。そして、J T Aからいただいた漫画「飛行機整備のひみつ」の読み聞かせもした。また、彼は小学校入学前の年に、家族で出かけた東京旅行で初めて乗った飛行機での経験を思い出したようであった。以上のことが重なり、「ぼくはボーイング777」を綴っていくことになった。

上記のなりきり作文は、飛行機の日線で綴っていくという国語の授業の続きでもあった。実際に、Aは、操縦士のことを考えながら、風の心地よさや離陸するときの気持ち、お客さんの耳への配慮や空の魅力の伝達等、多岐にわたって綴られていった。

「サーカスのライオン」 2月27日・月曜日 ☆は実践者からの質問 ⇒はAの回答

☆おじさんは、なぜじんざがいないのに、五つの火の輪をじゅんびしたのでしょうか。

⇒おじさんは、心でじんざが火の輪をとびたいという気持ちをわかっていたので、また、じんざと心が通じ合っていたから。それから、じんざがいないけど、いるという気持ちでお客さんに見せたかったから。

☆お客さんは、なぜ、じんざがいないのに、いっしょうけんめい手をたたいたのでしょうか。

⇒じんざが死んだとわかっていても、登場してとぶんだぞという気持ちでお客さんもいたからです。

☆いちばん強く心にのこった場面はどこですか。

⇒じんざが男の子を助けたところです。なぜかという、明日サーカスが最終日になるので、どうしても自分がやる五つの火の輪くぐりを男の子にも見せたかったから。とべるんだぞ、すごいぞということを見せたかったから。だから、助けたのだとぼくは思いました。

☆じんざに伝えたいこと。

⇒もし、ぼくが男の子だったら、じんざが生きていたら、「助けてくれてありがとう、明日、見に行くよ」と言う。でも、死んじゃったから、そのことばは気持ちで伝えて気持ちで見に行く。

教科書にある「サーカスのライオン」の読み聞かせをしたあと、内容をどのくらい理解しているのか等を確認するために一問一答形式で質問をしていった。おじさんやお客さん、主人公のライオンのじんざ、男の子の気持ち等、物語の内容をよく捉えており、「助けてくれて…見に行くよ」と自分の意見も話していた。

慣用句を使ってみよう 2月9日・木曜日

1. 「馬が合う」⇒お兄ちゃんとぼくはペーブレードで馬が合う。

2. 「ネコの手もかりたい」

⇒ばあばあが、おうちのせんたく物とか料理とかがいいそがしいときに、「ねこの手もかりたい」と思うかもしれない。

3. 「ネコのひたい」⇒北海道とくらべて沖縄は、ネコのひたいぐらいだ。

4. 「サバを読む」⇒ママが四十才ぐらいなのに、「二十才ですよ」とサバを読む。

5. 「波にのる」⇒お笑いげい人が、人気の波にのる。

6. 「朝めし前だ」⇒「ぼくにとって車イスのい動は朝めし前だ。」と言いたい。

7. 「雲をつかむようだ」⇒国会のう水大臣の答へんは雲をつかむようだ。

8. 「うり二つ」⇒ぼくとお兄ちゃんはうり二つだ。

9. 「ごまをする」⇒社長にごまをするため、おいしいものをあげる。

10. 「手に汗をにぎる」⇒ラグビーの試合でぶつかるのを見て、手に汗をにぎることがある。

11. 「うでが鳴る」⇒たん生日会の司会をしたくてうでが鳴る。

12. 「あいづちを打つ」⇒テレビを見たいのに、よびとめられたので、あいづちを打ってにげた。

13. 「ブレーキをかける」⇒へのご基地にブレーキをかける。

14. 「のれんを下ろす」⇒魚とかが売れないから、のれんを下ろす。

教科書にある「慣用句」について短文作りの学習をした。Aは慣用句を初めて知ったようで、「先生、『馬が合う』ってどういう意味ですか」と聞いてきた。一緒に辞書で慣用句ひとつひとつの意味を調べると、Aは、ほぼ即興で、しかも身近な話題も取り入れながら短文を作ることができた。短文ひとつひとつを見ると、慣用句の意味をよく理解していることが伺える。

りんごについて 11月9日・水曜日

りんごはあまずっぱいです。

りんごは切るのがめんどくさいと思います。

りんごの皮をほうちょうでむくとき、「むきにくいな」と言う人がいるかもしれません。

りんごは丸いです。

りんごの中はきいろだけど、皮は赤いです。

りんごの食感はシャリッとしています。かむと汁がジュワーと出てきます。

たぶん、それが、りんごのうまみを引き出すんだと思います。

りんごについて「食レポ」風に話してもらった。そのあとにも何度か食レポしてもらった。テレビの影響もあると思われるが食レポをよく理解しており、いろいろなことばを使ったりりんごを表現していた。「りんごの皮を…かもしれません」では、Aが言うには実際場面で「むきにくそうだったから」と、自分の経験を踏まえた表現をしていた。また、食感を「ジュワー」と表現したり、最後の「たぶん…りんごのうまみを引き出す」と表現したり、「うまい表現でうまいまとめ方だ」とAに伝えた。

巨人軍キャンプに行きたい 2月21日・水曜日

ぼくは、巨人軍のキャンプに行きたいという思いが非常～～～に強いです。阪神ファンの校長先生も「いいでしょう、OK」と言ってくれました。また、広島ファンのH先生も「どっちでも、いいですよ」と言ってくれた。しかし、日本ハム、大谷ファンのI先生は、ぼくに「まった」をかけました。ぼくが夢に見ていた巨人軍のキャンプに、どうしてもぼくは行きたいです。それは、テレビで、巨人軍を見てから、ずっと夢だったのです。I先生の気持ちも、非常～にわかりますが、巨人がどんだけすごくて強いのか、この目でたしかめてみたいです。ですから、今回だけは、巨人軍のキャンプに行かせてください。よろしくお願いします。

1月末、校外学習に行けることになり、学校のある同じ市内でキャンプをしている巨人軍キャンプを管理職から提案され、1年生から3年生までの低学年チームで行くことになった。しかし、I先生（1年生の担任）から「Aにちょっといじわるしてもいい」と実践者に提案があり、I先生は「私は大谷選手のファンなので、日本ハムキャンプに行きたい」とAに伝えた。巨人軍キャンプに決まりかけていたのに、それを聞いたAは憤慨し、実践者と相談して手紙文をI先生宛に綴ることになった。Aは語気も荒げて少し興奮気味で話して綴っていった。

手紙文は、阪神ファンの校長と広島ファンのH先生（1年生の担任）から既に承諾を得ていることを引き合いに出したり、I先生の気持ちを汲み取ったり、自分の強い気持ちを表現したりと、I先生を説得するにはどうしたらいいのか、真剣に考えて話していた。その願いが通じ、I先生に手紙を読んでもらい、ようやく承諾を得て巨人軍キャンプに行けることとなった。

#### 【エピソード4に関する実践者の考察】

1学期（5月）の新聞に掲載されたことは、Aにとって初めての経験で、かなり自信につながったようであった。掲載された新聞記事を約1週間、車イスのポケットに入れていて、会う人ごとに読んでもらっていた。保護者も喜んでくれて、他の学校職員やセンターのスタッフからも激励の声をかけられたようであった。

1学期までの日記文は、Aが綴りたいテーマを自由に綴ってきた。2学期になって、実践者が綴ってほしいテーマを提案したり、教科書の物語文を読んだ感想を綴ったり、手紙文を綴ったり、意図的にことばの学習要素を取り入れていった。Aは実践者の提案したテーマに「書きたくありません」と拒否することもあったが、私の娘からの手紙文等、周りの人の力も借りながら、きっかけをいろいろ作っていくことで綴ってくれるようになった。また、I先生の教育的ないじわる発言もあり、相手に自分の思いが伝わるような手紙文も綴ることができた。

Aは1学期の初めのころから「勉強がきらい」と何度も言っていた。しかし、話しことばを書きことばにする学習をたのしみながら続けていくことで語彙も増え、日常生活の中でも学習して得た語彙を積極的に使う場面もあり、自分のことばとして獲得することができた。

## ⑤ エピソード5・社会的な関心（オスプレイ墜落・平成天皇）

オスプレイつらいくについて 12月20日・火曜日

1週間前、海にオスプレイがつらいくしました。ぼくはオスプレイがとぶのをやめた方がいいと思います。もっとオスプレイのつらいくじがおきないように、ちょうさした方がいいと思います。あんていして、あんぜんなひこうができるようにちょうさした方がいいと思います。なぜ米軍はオスプレイのひこうを中止しないのでしょうか。ぼくはいったんオスプレイのひこうを中止した方がいいと思います。

沖縄県内北部地区の海岸にオスプレイが墜落しニュースで何度も取り上げられた。Aは戦争や米軍基地の話になると熱くなり語気も強めで話していた。文の中の「ちょうさした方がいい」、「いったん…飛行を中止した方がいい」と話したのは、ニュースの影響ではないかと考えられるが、それを自分の意見としてしっかり言い切れるのは、Aの平和に対する思いや強い正義感の表れでもあると考える。また、県議会議員（以下、県議）が学校視察に来たとき、一緒に県議と校内授業参観していた校長から「Aくん、県議会議員さんへの要望はありますか」と質問され、「はい、オスプレイは学校の上空を飛ばないようにさせてください」と即答していた。県議は「しっかり要望していきます」と返答していた。

平成天皇について 1月18日・水曜日

平成天皇はもうすぐ、あと約二年で終わります。次は、天皇の子ども（こうたい子）が、天皇になります。はたして、次の元号は、何になるのでしょうか。まったくぼくにはよそうがつきません。そもそも元号は、だれが決めるのでしょうか。ぼくは、ググってみました。元号を決めるときは、初めに大学の先生たちが、こうほを出します。その中から、かんぼう長かんがいくつか選びます。大臣たちがいるかくぎと国会ぎいのぎ長で話し合って決めるそうです。ぼくは、ちょっとおどろきました。なぜかと言うと、今まで知らなかったからです。ぼくは、おどろきをかくせませんでした。ぼくは、平和な世の中になってほしいので、平和をねがう元号がいいと思います。

「先生、平成の次は何になるの？」というAの疑問に対して一緒に調べることにした。平成は元号であること、天皇と関係していることを確認したあと、元号の決め方についてグーグルの音声検索を使って一緒に調べた。

文末の「平和な世の中…、平和をねがう元号がいい」という文には基地問題と同様にAの平和への熱い願いを感じた。

### 〔エピソード5に関する実践者の考察〕

Aは沖縄県の社会問題である基地のことや戦争、オスプレイのこと等に関心が高く、何よりも「平和」を願う気持ちが強かった。平和について熱く語るAの姿から正義感の強さを感じた。Aはテレビのニュース視聴だけでなく家族を含めて周りの大人たちの意見をよく聴き、それを自分の意見として言っているのではないかと考えられた。

## ⑥ エピソード6・人間観察（師長さん）

2びょうとうのし長さんについて 1月10日・火曜日

2びょうとうのし長さんの名前はJさんです。「Jし長」とよばれています。ぼくも「Jし長」とよんでいます。Jし長はしゃべりすぎなぐらいしゃべります。たとえば、ぼくに「Aくん、式ふくがカッコイイね」と言ってくれます。だけど前、カゼをひいて、のどがやられ、自分で「カゼに負けちゃダメよ」と言っていたのに、自分がカゼにかんせんしちゃってました。

Jし長さんは、いつも、たん生会とかあると「今日はたのしみだね、たん生会だよ」と言ってきます。だけど、ぼくはわかっています。ぼくは「知っていますよ」とは一度も言ったことがありません。なぜなら、し長がキズつくかもしれないからです。Jし長はしゃべったら2分ぐらいしゃべります。長いときは10分ぐらいしゃべるときもあります。Jし長は毎日「Aくん、おはよう」と明るい、え顔で言ってくれます。Jし長は「あそぼうね」と言っても、しごとがあつて、なかなかぼくたちとかかわれません。だけど、ひっしに早くしごとを終わらせて、りょう者さんとあそぼうとしています。  
ぼくはそれを毎日のように感じています。ぼくはウロチョロしながら、し長のことをかんさつしています。おそらく、し長は子どものとき、やさしい人と出会ったのかもしれない。なぜなら、やさしいからです。

Aとの会話の中で「人間観察力」の鋭さを感じた。そこで、実践者からの提案で、いつもセンターの病棟で会っている「J師長について」話してもらった。



### 〔エピソード6に関する実践者の考察〕

いつも忙しそうにしているJ師長のことをAは細かく観察していた。「ひっしに早くしごとを終わらせて…ぼくはそれを毎日のように感じています」から、J師長が利用者さんとの関わりを大切にしている姿を捉えていた。J師長が「やさしい人」である理由も「子どものとき、やさしい人と出会ったのかも…」と捉える力は、普段、他者の支援を受けながら生活している自分自身としっかり向き合っているからこそ、自分を支えてくれている他者を観察する眼が育ってきたのではないかと考えられる。また、人間観察したことを「書きことば」にすることで、より一層、自分の思いが鮮明になったのではないかと考えられる。

#### ⑦ エピソード7・自分と向き合う（回想録・自分の将来のことについて・死ぬことと生きること）

ユンボ 12月16日・金曜日

ぼくはユンボが好きでした。

ばあばと〇〇（自宅の地名）に帰るとき、いつも赤しんごうのときに「ユンボ」あるかなとさがしていました。ユンボがあったら、しんごうが青になるまで、ずっとユンボを見ていました。

今は大好きなものがあすぎてユンボのことをちょっとわすれかけていました。

ですが、昨日、久しぶりにユンボを見て思い出しました。ぼくはユンボが大好きだったんだと。

どこが大好きだったかと言うと「ガチャングチャン」と石とか土とかを持ち上げてくれるところが大好きでした。ユンボをそうさする人も大へんだと思います。そんなユンボをそうさする人に、ぼくは、あこがれていました。

Aは「ユンボについて書きたい」と、ある日突然言ってきた。「今は大好きなものがあすぎて」や「…見て思い出しました。ぼくはユンボが大好きだったんだと」、「そうさする人に…あこがれて…」等、幼少の頃を回想しながら意味づけしていた。

二十才のぼく 3月7日・火曜日

ぼくは、東京ではたらいっていると思います。ときどき、東京ドームに仕事仲間と巨人の応援に行くと思います。特に巨人阪神戦のときは大きな声で「巨人ガンバレー」と言っていると思います。

ぼくは、ひこうきが苦手ですが、たまに、沖縄に帰ってきていると思います。

かせいだお金をためて、アメリカに行って、メジャーリーグを見に行っていると思います。

それから、東京ディズニーランドにも行っていると思います。

ミッキーマウスとドナルドダックとふれ合っていると思います。

車イスは電動車イスを使っていると思います。

自動運転の車にのっていると思います。たぶんオレンジ色の車で、ニッサンの電気自動車だと思います。

A自身が、将来の自分のことをどのように考えているのだろうと考え、実践者からの提案で「二十才のぼく」を話してもらった。大人になってやりたいことを羅列しているようであった。また、その頃のニュースで自動運転の車のことが話題となり、好きな色の車に乗りたいと話していた。

三十才になったぼく 3月8日・水曜日

三十才になったぼくは、ひげもはえてきて、毎日そっていると思います。

英語の先生をやめて、福岡で仕事をしていると思います。サラリーマンをしていると思います。

パソコンを使って、サービスをさがしたりする仕事をしていると思います。結婚して、子どもと遊んでいると思います。

結婚している相手の人は、げいのう人で言えば、広瀬すずさんに、にている人だと思います。

子どもは、五人ぐらいだと思います。ぼくは車イスからおりて、だっこしていると思います。

結婚相手の仕事は保育士をしていると思います。毎日、にぎやかで、笑いのあるたのしい生活をおくっていると思います。

Aは「二十才のぼく」について流暢に話していたので、「三十才」はどうだろうと考え、実践者からの提案で話してもらった。結婚相手に関して、「げいのう人で言えば…」という言い方はテレビの影響であろう。また、「結婚相手の仕事は保育士」というのは、センターで働いている保育士さんをイメージしたようである。それから、「結婚して、子どもと遊んでいる」は、小1の子と昼間でじゃれ合って遊んだ経験からきていると考えられる。そして、最後の「毎日、にぎやかで、笑いのあるたのしい生活を…」は、Aが1学期からずっと言い続けてきていることであった。以上のように、Aは自分自身の経験を交え、三十才になった大人をイメージしていたと考えられる。

死ぬことと生きることについて 3月15日・水曜日

死ぬことについて考えることは、ぼくはイヤです。なぜかと言うと、自分が死ぬということが、こわいからです。今は、考えられないです。

でも、人間は、いつか死ぬとは、わかっていても、やはり、ぼくは死について考えることが、非常にこわいです。死ぬの反対は生きることです。ぼくは、たのしく、明るく、ギャグにかこまれて、生きていきたいと思います。なぜなら、いっぱい笑って、笑顔になったら、まわりのみんなも、笑顔になってくれるかなと思うからです。笑顔になったら、たのしくなってきた、元気が出てきます。これからも、たのしく、ハッピーで生きていきたいです。

このテーマも実践者からの提案であった。「死ぬことについて考えることはイヤです」と、Aは拒否した。「イヤだということを話したらいいんだよ」という実践者からの提案に少し考えて、「わかった」と言って、Aは話し始めた。文中の「なぜかと言うと」や「なぜなら」は実践者が合いの手のように使っていたことばであるが、実践者が言わなくても、次第に自分から使うようになっていた。

#### 〔エピソード7に関する実践者の考察〕

回想録的な内容である「ユンボ」は数年前の過去の記憶を辿りながら、そのときの気持ちを言語化することで自分の過去へも思いを巡らせ、しっかり振り返り、意味づけしていったと考えられる。

また、自分の将来についてA自身は面白がりながら話していた。Aにとって現実味はないかもしれないが、考える意味はあると感じ実践者から提案した。

それから、「死について考えることが、非常にこわい」では顔色を変えてイヤそうに話していたので、本音だと感じた。しかし、途中で「死ぬの反対は生きることです」と切り返し「たのしく、明るく、ギャグにかこまれて、生きていきたい」等、将来へ希望を持っているということを強く感じた。

将来のことや死ぬということ等、普段あまり考えもしないことを取って考えて書きことばに残しておくことで、あとで読み返すことも可能になる。

#### ⑧ エピソード8・手紙文のやりとりによる広がり（実践者の娘D、看護師Kとのやりとり）

3年1組のAくんへ 5月25日

〇〇（新聞社名）にのっていたAくんの作文を読みました。私は1度、学校で書いた作文が学校代表になったことがあります。でもAくんみたいに新聞にはのったことはありません。そのAくんが考えた作文を読んで、私はとても感動しました。その理由は私にはまねのできない、とてもいい作文だったからです。2度目もチャレンジしてみてください。いつもギャグばかりのお父さんだけど、それに負けないでギャグをいろいろ考えてみてください。お父さんから聞いているAくんのギャグがおもしろいのでAくんならぜったいできます。（作文も）Dより

実践者の娘に新聞掲載文を読んでAに励ましの手紙文を書いてもらった。同年代でしかも先生の娘からの手紙文とあってAは関心を示し、瞳を輝かせて聴いていた。そして早速、返信の手紙文も綴った。これをきっかけにペンフレンドになってほしいと考えたが、手紙文のやりとりは数回で終わってしまった。

Kさんへ 2月9日・木曜日

チョコレートのおかし、ありがとうございました。ぼくは、チョコレートが大好きです。さっそくいただきました。チョコは、あとからあまみがジュワーと出てくるおかしなんですね。あまみがほどよいチョコレートでした。ぼくの日記の中で、いちばんおもしろかったところは、どこですか。こんど、教えてください。ありがとうございました。Aより

センターの看護師で、以前Aの担当だったKさんは、Aの日記帳の噂を聞きつけ、教室まで来て「日記帳を読ませてほしい」とお願いに来た。Aは快く承諾した。数日後、日記帳がお菓子と一緒に返ってきた。日記帳には「ありがとう、おもしろかった Kより」と付箋紙が貼られていた。Aと相談し、Kさんに上記の手紙文を書いて渡した。また、実践者は直接Kさんに会い、Aに返事の手紙文を書いてほしいとお願いした。すると数日後、かわいい便せんが教室に届いた。

Kさんからの返事 2月10日

Aさん、おはようございます。昨日は、ステキなサプライズをありがとうございました。とーってもうれしかったです。5冊目の日記、読みました。感想としては、Aさんはいろんなことを知っていて、すごいなと思いました。

「昨日トランプ大とうりょうについてどう思いますか」と聞かれ、私はタジタジでした。  
 答えられずすみません。もっと勉強します。  
 日記を読んで、私も幸せな気持ちになりました。  
 Aさんがうれしかったり、おもしろかったり、楽しみにしていたりしたことを、私も分けてもらった気分です。  
 ダジャレもおもしろかったです。  
 「ありがとうございます」、「3・2・1 さよならプー」、「みかびん」、「ドレミファソラド」など笑っちゃいました。  
 それから、勉強になったこともたくさんありました。  
 天皇があと2年で終わり、元号が変わることやTPPりだつのこと、その他スポーツ選手についてや、政治についての話などどれも考えさせられました。  
 やっぱりAさんはすごいなあ。  
 それから、バニラアイスの話やタコやきの話、とんかつ太郎の話、やきとりの話など、食べものの話もおもしろかったです。  
 私にとってのナンバーワンは…「Jし長について」です!! Aさんのユーモアとやさしさに感動しました。  
 これからも日記を書きつづけて下さいね。楽しみにしています。 K

#### 〔エピソード8に関する実践者の考察〕

娘やKさん以外にも、転校していった同級生のLや身近な人たちと手紙文でのやりとりを行った。手紙文という相手との気持ちのやりとり、いわゆる相手に思いを巡らせるというリアリティさや、文字でのやりとりを経験することで、綴っていく楽しさを味わえたのではないかと考えられる。また、手紙文を送る相手に思いを寄せ、それを書きことばにすることで、ことばによる間接的なやりとりが可能になり、A自身の世界が広がっていくと考えた。そのような経験が今後のAの内面の成長の糧になると考える。  
 (2-4章・船越執筆)

## 5. 総合考察

### (1) 「書きことばの学習」船越実践の全体像

前章における実践者による考察を受けて、本章では共同研究者の立場から村末が総合考察を行う。まず、初めに、船越による「書きことばの学習」実践の全体像を図3のように整理した。

この学習では、題材を決定するためのやりとりの後、題材に関するAの内面世界を教師はまず最初の受け取り手として聞き取ることになる。Aの内面世界は、Aの話しことばによって外化されることにより初めて他者と共有される〔共有化1とする〕。さらに教師は、その言葉（内面世界）を児童の四肢麻痺という障害に対する「合理的配慮」としての代筆という支援によって、書きことばの世界へ変換していった。この過程で、教師とAとの言葉によるやり取りにより、発せられた単語の吟味や文意の確認、文の推敲等が行われ、文章が1つの作品として完成していくのである。また同時に、Aの内面世界が他者（教師）のフィルターを介して客観化され、本人に意味づけられていく。このことは自己認識の深まりとともに、自分を中心とした周りの人や世界の意味と、そうしたものと自分とのつながりについて認識するための重要な作業となるものである。

さらに教師は、書きことばとして表現された作品（文章）について、Aの保護者や家族、友だち、あるいは教師や医療者、その他つながりのある人たちへの「伝達」（公開）という作業（日記を読んでもらう、手紙として渡す、新聞に投稿する、感想や返事を書いてもらう…等）を意図的に行っている。伝達された側は、その文章を通して彼の内面世界に触れ、理解し〔共有化2とする〕、話しことばや書きことばによりAの世界に応答するのである。こうして線としての二者関係ばかりでなく、面としての複数の関係においても「つながり」はそれまで以上に拡がり、深化していく。逆に、Aにとってはそうした自分につながる存在を「重要な他者」として再確認することにもなったと考えられる。内田（1990）は、ことばの機能を「人とのやりとりの手段」と「内的なモデルを構成する手段」として捉え、「人間化の過程を推し進める」ものと述べているが、本実践は正にAの人間的成長過程であり、内田の言う「世界づくり」の過程であったと言えるだろう。

さて、この実践過程における教師の作業サイクルは、①聞き取る→②代筆する→③Aの周りにいる重



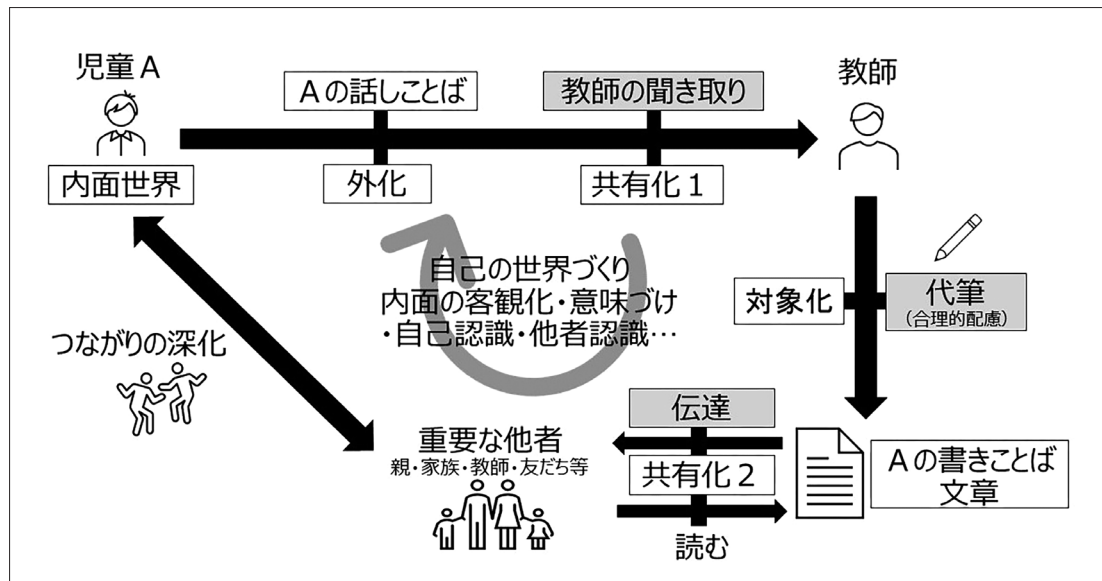


図3 船越実践の全体像

要な他者に伝達するということであるが、前提として重要になるのが、教師とAとの関係性についてである。Aの日常生活の中での関わりを通して、教師は、Aが今何に関心を持っているのか、あるいはAが見つめるべきテーマは何かといったことについての情報を、可能な限り把握しておく必要がある。その意味で、Aの生活に寄り添い展開していったこの実践過程は、生活教育実践であり、それをベースにした生活綴り方実践と言えるが、こうした関係性を土台にした書きことばの学習が年間を通して積み重ねられることにより、Aの「世界づくり」はスパイラル的に展開していったと考えられるだろう。

実践の全体像を以上のように捉えた上で、以下3つの視点からもう少し詳しく考察を進めてみたい。

## (2) 世界づくりとしての書きことばの学習

障害児教育における書きことばの学習については、聴覚障害児に対する取り組み（例えば、森原・白石、2015等）や知的障害児を対象とした協同問題解決や文通を活用した取り組み（例えば、榎本・隔田、2002；大澤、2004；大久保ら、2009等）、肢体不自由児に対するICT機器等の活用による書字能力の獲得に向けた取り組み（例えば、佐藤ら、2016等）等が報告されているが、本実践は、そうした実践とは一線を画し、書字能力といった技能習熟・獲得に向けた取り組みとして展開されたものではなかった。

これは、自由に動かせるのが、左手の人差し指だけ、というAの障害特性から導かれた目標設定であったと考えられるが、話しことばの書きことばへの変換という側面からのみ考えれば、現在のパソコンやタブレット等の音声入力ソフトの技術的進歩を背景にした機器の活用による書きことばの学習の展開も考えられたはずである。しかしながら、そうした実践では機器を操作することによる書字能力は獲得できたとしても、自己の内面を外化し受け止めてもらい、それへの応答を通して醸成される「人間化」や「世界づくり」という、とりわけ9歳という発達段階に必要となるであろう学習経験については成立し得なかったのではなかろうか。

肢体不自由のある障害当事者である小森は、自己のアイデンティティ獲得に関する省察の中で、次のように述懐している。「出来事や経験を解釈し意味づけていく力は、自分について語ったり文章を書いたりすることによって自己を振り返ることで養われるのではないと思われる。それに対して教師が応えていくことが必要であり、教育的な指導ではなくて、自然で無理のない対話のような形になるのがいちばん望ましいと思う。なぜなら、対話による語り直しをとおして、肢体障がいのある子が自ら主体として出来事や経験を解釈し意味づけていくプロセスが重要で、その繰り返しがそのような力をはぐくむと考えられるからである。」（別府ら、2016）ここで重要なのは、書きことばに変換する過程で必然的に



生起する「対話」なのであり、変換され文章化された結果だけではないということである。機器の活用の前に、小森の言う「出来事や経験を解釈し意味づけていく力」を育んでいくことが必要なのであり、このことは「書字能力」の獲得を目指すとり組みにおいても十分に配慮すべきことではないだろうか。

さて、学校以外の生活の場のほとんどがB療育医療センターであるAにとって、当時生活の中心はテレビ視聴であった。このことは、一見非常に狭い世界で過ごしている否定的状況として捉えがちであるが、四肢麻痺とともに生きるAにとっては、様々な情報が集約されて届くテレビ前の空間は、世界と社会につながる入口として重要な意味を持つ大切な場所であり、共に生活する仲間たちとの交流の場でもあった。実践者は、まずその現実、すなわちAにとって日常生活－「世界」を肯定的に受け止めることから実践をスタートさせた。

年間を通してとり組まれた書きことばの学習実践では、216の作品が生まれたが、その約3分の1がテレビ視聴による情報を題材にしたものであった。実践者は、Aがそこから入手した情報、それをもとに考え学びとった内容を、聞き取りによる話しことばによって外化させ、代筆支援によって文章化していくことで、まず、Aの内面世界を共有した。そして、それを他者とつなぐことで、A自身の内面世界を、テレビの前の空間に留めるのではなく、人々とのつながりの中に開き、拡げていったのである。

Aは自分の内面を書きことばにする過程で、自己と対話をすることを求められ、その積み重ねの中で自己認識を深めていったといえる。また、実践者が行った電話インタビュー（2020年11月実施）において、保護者は「次の年（4年生）になって時々『読んで』と言われて、日記帳を読み返すことがよくあった。本人もその頃の自分の意見や情景を思い出しながら、懐かしがりながら聞いていて、『あーあの頃はそうだった』と振り返っていた。いい思い出として残っているようである。」と答えている。Aにとって、その日できあがった文章によって描き出された世界が、音声言語として自然に消え去るものではなくなくなったということは、過去の自分との対話の入り口ともなる記録となり、同時に未来への道しるべとなったということでもあった。

さらに、単なる事実の記録という意味だけではなく、例えばプロ野球キャンプ地決めに巡る自己主張や、療育医療センターの師長さんへの気配りについても、他者認識を深めていく成長過程についても文章化され刻まれている。内田（1990）は、「他者との共有の過程で、表象は洗練されたり、外化される以前とは異なる形に変化する。他者と共有することを通じて、世界についての理解は、表象を外化せぬままにしておく段階に比べていっそう深まる」（ママ）と述べているが、このことは、実は逆の立場からも言えることであった。ふたたび保護者の電話インタビューから取り出してみよう。保護者は、Aと向き合う自分自身について、「Aの世界がわかった。本人の内面的な部分も知ることができた。会話も膨らんだし、おかげさまで話題も増えた。こちらからどんな言葉かけをしたらいいのかが、しやすかった。」と答えている。書きことばの学習によって内面世界が外化され生まれた文章は、AのみでなくAにつながる人々の「世界づくり」にもつながったと言えるだろう。

### ③ 教師の役割と指導性の発揮

Aの綴る文章は、いわゆる一般的に定式化された子どもの作文とは異なり、豊かな感性に支えられたユーモア溢れる作品がほとんどである。このことは、実践者自身の社交的な人柄にも影響されていると考えられるが、何よりも実践者の思いや教えたい内容を優先させるのではなく、あくまで子ども自身の生活を出発点としながら、子どもの思考に寄り添い展開するという姿勢によって支えられている。

実践をスタートさせた時点で、Aはあまりこの学習に意欲的ではなかったにも関わらず、最終的には216の作品を生み出した。基本的にはAの生活日記の指導を中心に展開されたが、実践者は国語科等の教科指導においても丁寧にとり組み、書きことばの学習を総合的に展開した。考えてみれば言語を伴わない学習活動はあり得ず、教育課程を見据えた年間の指導プログラム全体の中で、実践可能な形で、継続的に書きことばの学習を仕組んでいくことが求められると言えよう。しかしながら、ややもすれば見

過ぎされがちなことであるが、実践の継続性、Aにとっての「最重要他者」として存在し続けるという教師という基本的役割を、教師の重要な指導性の発揮の姿として再確認しておくことは重要である。

さらに、教師の指導性の発揮の仕方として特筆すべきことは、実践者が、Aとつながる校長を始めとする同僚教師、療育医療センターの人々、家族その他との協働教育実践としてこの実践を展開していることである。実践者は、自らの実践を教師と児童の2人の関係の中に押しとどめておくことなく積極的に公開し、Aにとって重要な他者としての存在につなぎ、そのつながりの質を高めていくという仕事も行なっている。この実践においては、図2に示したように、教師の聞き取りと代筆というところまでにとどまらず、それをAの周りに存在する重要な他者に伝達するということが特に重要であった。特別支援教育に限られたことではないが、教師の重要な役割の1つは子どもたちと子どもたちの世界を、他者と他者のもつ世界につなぎ、広げていくことではないだろうか。Aの世界づくりは、Aの内面世界が外化されることによって作り出された書きことばの世界を、重要な他者につなぎそしてその重要な他者とともに作り出していく協働実践によって支えられたと考えられる。

#### (4) 実践の継続的展開に向けて

最後に実践の継続的な展開に向けての課題についてである。現在、コロナ感染症による状況も相まって、GIGAスクール構想におけるICT活用の具体化が進展中であり、障害児教育の分野においても教育方法の充実・開発が期待される場所である。しかしながら、内面世界の共有による書きことばの獲得という視点からすれば、本実践で追求されたような1対1関係の〔共有化1〕の段階が極めて重要だと考えられる。すなわち、本報告の冒頭に触れたように、児童の言葉を全身を耳にして聞き取るという関係性のもとで、他者に自分の思いを伝えることの素晴らしさや楽しさ、そしてその返事を受け取ることの喜びについて、とりわけ小学校段階で学び体験しておくことは、その子の成長にとっての土台となるものではないだろうか。ICT活用が、そのことをおろそかにすることにつながらぬような意識的な配慮が求められる。

本実践は、小学校3年生段階において、すなわち9歳という発達の節目の段階においてとり組まれた。その後、部分的には書きことばの学習が引き続き展開されたが、残念ながらまとまった実践として継続されたとは言い難い。自己の世界づくりという課題は、誕生から死までの継続的課題なのであり、その発達の段階に応じて適切な形で準備される必要がある。特に、学校教育段階においての意図的関わりは重要であり、児童への継続的な支援が求められる。それを可能にするための手立てを、学校全体の教育体制としていかに構築していくかが課題であろう。

(5章・村末執筆)

## 6. おわりに

次の「3年生の思い出」は、修了式の前日の作品である。「日記や作文を、たくさん書いて良かったな、と思います。なぜかと言うと、日記や作文をたくさん書くことによって、しょうらい、ことばを、たくさん覚えて話が上手になると思うからです。」とあるように、A自身も語彙を増やすことができたことを自覚し、その力でさらにことばを獲得して生きていくことを見通している。

Aの話しことばを書きことばにしていく学習活動の中で、Aの世界づくりは確実に展開されていった。保護者や他の人との関わりも深まり、更に中学生になった今では、懐かしく振り返ることもできるようになった。

3年生の思い出 3月23日・木曜日

もうすぐ、3年生も終わりです。

ぼくが思い出に、残ったことは、焼き鳥を食べたことと、新ネタを、たくさんつくったことです。

焼き鳥は非常に、おいしくて3本でも物足りないくらいでした。

もっともっと、ぼくは焼き鳥が好きになりました。新ネタは、頭にフツときたのを言ったのですが、あまりうけませんでした。もっとうけるネタを作りたいと思います。

日記や作文を、たくさん書いて良かったな、と思います。

なぜかと言うと、日記や作文をたくさん書くことによって、しょうらい、ことばを、たくさん覚えて話が上手になると思うからです。

かけ算九九に、ちょう戦しました。4と6, 7, 8の段が、むずかしかったです。

特に4と7の段で、「ししち」とか、「しは」、「しく」が、にているから、いいにくかったです。

でも、ぼくは、かけ算九九のランダム問題以外は、全部クリアしました。

次は、ランダム問題をクリアできるように、がんばりたいと思うしだいでございます。

「4年生になったら、学習がむずかしくなる」と、ばあばあに言われました。

かくごして、がんばりたいと思うしだいでございます。

4年生の担任の先生は、ぜひ男の先生に、お願いしたいところでございます。3年生は、非常～に、たのしかったです。

引き続き、4年生も、たのしく、やっていきたいと思うしだいでございます。

書きことばを綴っていく学習活動は、子どもの日常のつづやきを綴ることから始まり、それを書きことばにしていくことのたのしさを味わいながら、内面的な成長に合わせて発展させられる活動であると考え。また、書きことばは、手紙文として相手と間接的にやりとりのできる手段ともなり、自分自身の世界をつくりあげ、拡げていくこともできる。

今後もAが書きことばを綴っていく活動を継続していくことで、自己表現がより豊かにできるようになること、自分自身の世界観をより深め高めていけることを期待したい。

(6章・船越執筆)

## 謝 辞

本研究を進めるにあたっては、対象児童Aさん、およびAさんの保護者の理解と協力をいただきました。ここに記して、感謝の意を伝えます。

## 注

- 1) 内田(1990)は、「子どもは想像力をはたらかせ『もの』や『こと』についての体験や印象を複合して、たえずイメージを作り出し、作り替えながら『内的な』世界—『現実についてのモデル』—を構成していく」とし、これを「世界づくり」と呼んだ。さらに、「このときの『世界』とは子どもを取り巻く外界の『もの』や『こと』だけでなく、外界と内的世界をつなぐ自分自身のからだ、さらには内的世界としての認識それ自体をも指している」とする。筆者らの使用する「世界づくり」という概念は、基本的にこの考え方を前提とするものである。

## 文 献

- 別府悦子・平野華織・小森淳子, 2016, 「肢体不自由のある障がい当事者のアイデンティティ確立と 学校教育の課題」『中部学院大学・中部学院大学短期大学部 教育実践研究第1巻』: 91-98
- 榎本克実・隔田征子, 2002, 「協同問題解決という視点からの知的障害生徒への作文指導の試み」『特殊教育学研究, 40(3): 323-331
- 梶村光郎, 2017, 「生活綴方における言語活動: アクティブ・ラーニングの視点から」『沖縄大学人文学部こども文化学科紀要』
- 森原都・白石恵理子, 2015, 「聴覚障害児にとっての『書く』ことの発達の研究」『滋賀大学教育学部実践センター紀要第23巻』: 39-44
- 大久保賢一・深川麻衣・安達潤, 2009, 「協働問題解決に焦点を当てた広汎性発達障害時への作文指導の試み」『北海道教育大学紀要(教育科学編) 第60巻第1号: 179-189
- 大澤宏規, 2004, 「知的障害児を対象とした書字学習支援における文通の活用に関する事例的研究」『発達支援研究 vol.7』: 4-6
- 佐藤究・境澤直哉・小林巖・布川博士, 2016, 「特別支援教育における書字学習支援アプリケーション「かける君(極)」と連携する個別指導管理支援システムの実装と評価」『情報教育シンポジウム』: 175-181
- 竹沢清, 2005, 「14 聴覚障害」全国障害者問題研究会『全障研第38回全国大会報告集 長野』: 70-71
- 内田伸子, 1990, 『子どもの文章』東京大学出版会